

2026年度 総合型選抜Ⅲ期（文章読解型） 出題の意図・解答例

1 出題の意図

課題文を読み、「『あたりまえ』を疑う」という著者の主張を適切に読み取り、的確に解答できるか、さらに課題文の内容に即しつつ、受験生自身の過去の常識すなわち受験生自身の「あたりまえ」を疑い、客観視することができるかを問うた。

問一は、「あたりまえ」を疑うこと具体例として本文中に挙げた事例を字教内で要約しつつ、同時に著者の主張を適切に読解し、説明できるかを問い、読解力を試した。

問二は、受験生がこれまで当然のこととして疑うことなく捉えて来た常識、ルール、習慣、などについて外的要素とともに自身の内的要素を客観視し、本文に即しつつ自分の考えを述べられるかを問い、論理性や思考力、表現力を試した。

2 解答例

問一

「あたりまえ」を疑うとは、世の中を質的に調べるセンスであり、具体的な営みを指す。大学の講義での着席の仕方や保育園児の態度の変化の背後には暮らしの中で適切にふるまう何らかの「方法」があり、人間はそれを微細に駆使しながら生きている。すなわち、私たちの暮らしの大半を覆う「あたりまえ」の世界の中に存在する様々な「方法」を読み解き、その中の問題を解明しようとする営みが「あたりまえ」を疑うことである。

問二

私が生活の中で「あたりまえ」と捉え疑わなかった具体的な例として、私が通っていた中学校の校則について述べる。私が通っていた中学校には登校すると朝礼の前に担任に自分のスマートフォンを預け、下校する時に返却してもらわなければならない、という校則があった。当時はそれが「あたりまえ」のことであり、特に疑うことはなかった。しかし振り返ってみると、なぜ当時の私はこのような校則を「あたりまえ」のことと捉え、それに従っていたのだろうか。考えられることを三つ述べる。

第一にそれが校則だから、学校の規則だから、と担任や学年主任、生活指導の教師たちが繰り返し注意していたからである。自分よりも偉く権威がある大人たちが言ったことを疑うことが無かった。

第二に同調圧力である。私の周りの同級生たちも皆が校則に従っていたため、皆と違うことを一人だけ行うと周りから浮いてしまうのを避けたかった。

そして第三に私自身が周りの影響を受け、いつしか自分は校則を守っているか、と自分自身を監視するようになったからであろう。「あたりまえ」が私の外から影響するうちに私自身の中に根差すようになり、「あたりまえ」を当然のものとして捉えるようになった。